

地域ニュース

痛の学 入門講座

◆ 59 ◆

外傷性頸部症候群

「外傷性頸部症候群」とは自動車事故、スポーツ中のケガ、労働災害などによって首の骨（頸椎）に本来の可動域（動かせる範囲）を超えるような力が加わった結果、頭、首の後ろ、腕に痛みやしびれ、肩こりなどを生じるものである。

1928年、米国のクロウが、受傷時に「首があたかも猛獣使いのむちのようにしなる」ことから「むち打ち損傷」として報告したが、最近ではこの名称は不適切と考えられている。

わが国では米国に遅れること30年、1958年に東北大学の飯野教授によって紹介されている。多くが「頸部挫傷」「頸椎捻挫」であることから、他覚的所見に乏しく、MRI（磁気共鳴撮像）でも異常をみることは少ない。

受傷直後から、首を動かすと痛みが生じ、日常の動作が制限される。さらに発症後3カ月を過ぎると頸部の交感神経（自律神経の一種）の興奮、循環障害などが起こり、初期からの痛みや

画像でも異常分からず

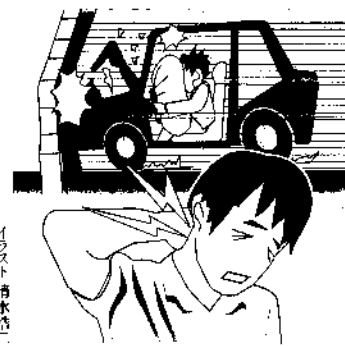


イラスト 清水浩一

しびれに加えて、おでこの痛み▽めまい▽かすみ目▽耳鳴り▽ふらつき感▽不眠といった多彩な症状をきたすようになる。

この場合にも明確な神経症状をみることは少なく、自覚的愁訴が中心となることから「賠償や労働災害認定がスムーズに進まない」とする患者さんが多くおられる。なお、これらの自律神経失調症状を伴うものを「バリエュー症候群」と呼ぶ。

自動車業界においても、衝突時の頸部への負荷軽減のため、ヘッドレストやエアバックの改良が進められてきたが、患者数が減ったとの印象はない。むしろ増加傾向にあり、わが国では人口1万人あたり30人を超える発症があると推定されている。

ペインクリニックと本症との関わりは古く、私の恩師である



森本昌宏（もりもと・まさひろ）
大阪なんばクリニック（06・6648・8930）本部長・院長。平成元年、大阪医科大学大学院修了。同大講師などを経て、22年から近畿大学医学部麻酔科教授。31年4月から現職。日本ペインクリニック学会発着会員。

兵頭正義教授は、「ペインクリニックを大阪医大に開設した当初は、日夜、むち打ち損傷の対応に追われたものです」と述べられていた。わが国においてペインクリニックが産声をあげた1965年ごろのことである。実に年間に400人の本症患者さんの治療にあたったとする記録が残されているのだ。

兵頭教授が、その時期に星状神経節ブロックや頸部硬膜外ブロック、トータルスパイナルブロックなどを治療に取り入れていたとする事実には改めて敬服させられる。

現在、私の施設でも同様の神経ブロック療法による治療を行っているが、兵頭教授から直接手ほどきを受けたさまざまな神経ブロックを駆使できることは大きな財産である。

現在、首にポリネック（簡易固定器具）を巻いている方には、交感神経系の異常が起る前にペインクリニックを受診することを勧めたい。

「アタリメを噛んだはずみでむちうちになりたる経緯分らぬでもない」馬左宏

第一日曜日に掲載します。